

ニッポン ドクター和の 臨終図巻

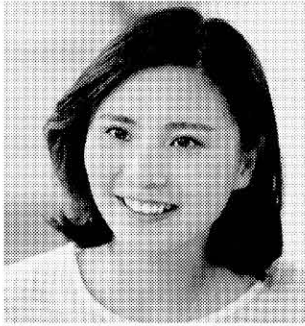


櫻井翔さんと一緒にがん保険のCMに登場し、講演会なども精力的に行っていた山下弘子さん。太陽に向かって咲くヒマワリのように、テレビで見かける笑顔が輝いていて、気になる人でした。弘子さんに肝がんが見つかっただけは19歳。大学1年生の夏。

おながが出てきて、「太ったかな？」と思っただけで、肝がんだったそうです。腫瘍は2センチほどの大きさになっていました。あまりにも唐突な「余命半年」の宣告でした。

肝がんというと、酒好きの人がなるというイメージを持っていますが、実はその7割がC型やB型肝炎

49 山下弘子



(アフラック提供)

人生はデザインできる

長尾和宏 (ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で「人を診る」総合診療を目指し、近著「葉のやめどき」「痛くない死に方」はベストセラー。関西国際大学客員教授。

炎ウイルスの持続感染に起因するものです。「沈黙の臓器」と呼ばれる肝臓。初期は自覚症状はほぼ現れません。腹部のしこりや痛みを覚えるのは進行してからです。

幸い弘子さんは手術で腫瘍摘出できたものの、1年も経たぬうちに再発、肺転移も認められ、再び手術へ…。過去の記事を読んでいると、この頃より弘

子さんの生への強い闘志が感じられます。

「肺に転移しているとわかってからこの一瞬の大切さが、今生きていることの素晴らしさ、時間はいつどんなときに終わるかわからない、ということを真の意味において少しずつ理解していきました。どんなことにも意味があります」

「もし明日が最後だとしたら、今日泣いてたらすらいもつたいなくないですか？ だったら今日笑って明日を迎えたい」

絶対に明日も生きることを決意した弘子さんはさまざまことに挑戦します。自動車免許、フラダンス、富士登山、スキューバダイビング、海外旅行はなんと30カ国近くに出かけたといいます。20回にも及ぶ手術を繰り返しながら、です。

そして昨年夏にご結婚。純白のウエディングドレス姿の写真を拝見しましたが、すでに骨やリンパ節に転移をしているとは思えない、幸せいっぱいほほ笑みでした。

私は余命宣告という言葉が嫌いです。余命とは、あくまでも平均値に過ぎないのに、人によっては絶望のふちに立たされてしまうから。

しかし弘子さんの場合は、余命半年と言われたからこそ、人生を1秒たりとも無駄にせず生きられたのかもかもしれませんね。

夫の朋己さんがつづったブログによれば、2月末に京都旅行を楽しみ、芸妓(けいこ)体験にも挑戦したと。でもその翌日、気管から出血、緊急入院したそうです。

3日連続で手術をしたものの、肺機能が低下し、意識が戻らぬまま3月25日に亡くなりました。25歳でした。辛いことですが、でも、若くてかわいそうと言っただけ、なんだか違う気がします。

余命半年と言われながら5年半もの時間を全力で生きられたのですから。末期がんでも、人生は自分でデザインできるので